

IFERI

## 明石純一先生のセミナーについて

ディルーシャ・デヒピティヤ

国際地域研究専攻 1 年次

2011 年 6 月 13 日

本レポートは、明石純一先生（筑波大学人文社会科学研究科）のセミナーについての報告である。セミナーは主に先生の研究履歴と研究内容のご紹介であった。先生は旅行が好きで、学生時代はよく旅行をしていたという。そういうご自身の経験から、特に若いうちに海外旅行をし、さまざまな経験をした方がいいと仰っていた。また、体育の先生であったご両親のもとで、体力を大事にして育てられたそうである。それは私にとってとても興味深い話だった。体力は何よりも大事であると私も信じているからである。

先生の専門分野である政治政策は、私にはほとんど馴染みのない分野だった。しかし先生は power point などを使い分かりやすく説明してくださり、私たちに質問しながら講義を行ってくださったので、問題なく話についていけた。例えば、日本語を勉強し始めたきっかけについてなどの質問があったので、自分の経験と先生のお話を関係づけることに役立った。そして、先生のご著書も紹介してくださったので、機会があれば読んでみたいと思った。それは、先生の研究分野について勉強しようという動機付けになるだろう。

私にとって先生の講義で一番興味深かったのは、体力の大切さについてのアドバイスだった。勉強で忙しくて倒れそうになる場合もあるが、そういう時に体力の大切さを実感するし、気を付けなければならないと思う。研究方法だけではなく、その面でも明石純一先生の講義は有意義な講義だった。

## 異分野融合リサーチワークショップV

文芸言語フランス語学領域 二年次

プロバティスト

### 明石純一先生のお話の概要と感想

2011年6月13日のIFERIセミナーでは明石純一先生のお話をうかがった。大きなインパクトを受けたことの一つは、研究というものは相対的なものだということである。また、大学院生はどのように過ごすべきかというアドバイスや、海外生活での経験談は、自分の研究活動に非常に役立つ内容だったと思う。

先生は、博士論文の執筆と論文執筆準備のための調査研究などについて、実際の体験と感想を交えてお話くださった。例えば、修論を提出してから博士論文へ向かうのが、私が思ったより、困難に沢山遭う時期だと説明された。しかし、一番印象に残ったアドバイスは、「何より体力が必要である」というご指摘であった。

先生が海外調査に基づく制度の比較分析を行って痛感なさったのは、研究するには、インタビュー調査もアンケート調査も、色々な観点やアプローチを考える必要があるという点である。例えば、どこかの民族の政治的制度などを明らかにしようとするならば、一方的な見方を避けるために、現場まで行くべきであるとのお考えを述べられた。

このように、個人的な問題意識から社会的な問題設定へと至る変遷は、相対的なものである。来日した外国人の生活基準を分析している明石純一先生は、同じ国に色々な民族やライフスタイルが共存していること、すなわち同じ国の中においても生活基準とは相対的なものだということを理解しながら、この相対性を忘れるべきではないということを仰りたかったのだと思われた。

## IFERI セミナー；明石純一先生

文芸・言語専攻 応用言語学領域 2年

田中佑

6月13日に筑波大学で行われた明石純一先生の御講義を以下にまとめると共に、関連して考えたことを記す。

明石先生はまず、ご自身の研究遍歴をご紹介くださった。明石先生は大学学部時代、勉学よりもアルバイトに専念し、貯まったお金で海外を放浪し、世界を見て回ったという。また、現在の研究テーマである日本における人民移動や移民受け入れに関する研究へと足を踏み入れるきっかけは、アメリカの大学院時代に、指導教官が人民移動や移民受け入れに関する日本の現状に興味をもたれ、明石先生がその調査に帰国したことであったという。明石先生は上記のご自身の1990年代を「個人的な問題意識から社会的な問題設定への変換期」と位置付けておられた。

2000年から2003年前半は「博士論文執筆準備のための調査研究」に当て、2003年後半から2004年の期間で博士論文を書かれたそうである。社会学では、1) 文献調査、2) インタビュー調査、3) アンケート調査、を行い、ある法の成立過程を予測していく。一つの法の成立は多くの人々の利害を生む。そのような人々に対するインタビューやアンケートからは真実は見えてこない。社会学の研究者はこのような事情を持つインタビューやアンケートから法成立過程に関する仮説を導き、その仮説が多くの事象と整合性が取れたときに良い仕事をしたと思うのだと仰った。

明石先生が、上に記した、ご自身の研究生活においてもっとも重要だと感じたのは「体力」なのだそうだ。何をやるにしても、身体が資本であり、それなくしては何もできない、というのは明石先生のご両親の教えであり、ご自身も研究を通じてそれを再認識したという。

明石先生は、現在、国際都市つくばの新しい国際化施策「定住外国籍児童に対する「職育」プログラム」という活動をなさっている。定職を持たない未成年者や未就学の外国籍児童が、地域社会から隔絶され、自立心を養う機会を持つことも、また、長期的なキャリアパスを描くこともできずにいることは珍しいことではない。国内でも有数の国際都市であるつくば市にも、職業能力開発を必要とする定住型外国人が多くいる。このプログラム

はこのような人々への「職育」分野の持続的な支援と連携体制の構築を目指すものである。

明石先生のお話は主にご自身の研究遍歴であった。細かな研究手法などは異なるが、研究に文献調査が欠かせないこと、そして「体力」が必要なことはよく共感できた。特に応用には体調を崩して研究を進められない人が多くいるため、自分も気を付けなくては行けないと強く感じた。また、最後に紹介していただいた「定住外国籍児童に対する「職育」プログラム」は明石先生が研究の過程で見たり、関わったりした子供たちをなんとかすることができないかと考えた結果のものであるとのことだった。言語学は突き詰めて行こうとすると抽象的になりやすく、他の領域の研究を介さずに、直接的に社会に貢献するのが難しい分野であると思う。しかし、だから考えなくてもいいのではなく、常に何かを考えていなくてはならないということを改めて認識させていただいた御講義であった。

IFERI セミナー 6月13日

人文社会科学研究所

哲学・思想専攻

200930008 松本秀昭

政策という観点から移民について考察したことがないので興味深く思いました。興味があるのは歴史的に移民政策の意図せざる結果が、国民国家システムにどのような影響を与えてきたのかということです。

移民というと、私は倫理学領域なので人権やシティズンシップとの関係が真っ先に思い浮かびます。人の移動自体は特別なこととは考えられないので、いわゆる移民というものは近代以降特有のものと言えるのでしょうか。アンソニー・ギデンズは近代国民国家化以前の国家と近代国民国家の違いは国境の明確な画定であると言いますが、移民が移民と名指されるためにはこの国境の確定が必要です。また、産業資本主義が労働力を商品化していることも必要になるでしょう。移民は商品化した労働の輸入と考えられるからです。そして、労働力の商品化には生産と消費の分離、つまり土地と人との分離が前提となっています。人権としての移動の自由というものは、天賦の権利のように受け取られがちですが、こう考えてみるとそれほど単純なものではなさそうです。

移民という現象を雇用を求める個人の自由な移動の結果と考えることはできない、ということはいくつかの研究者の共通した見解であると思います。近代国民国家の政治システムと経済システムの歴史的な構造変化やそれに伴う格差・階級の問題を考慮する必要があるでしょう。移民となることによって自由を実現することができるのは、ごく一部のエリート層でしかありません。多くの移民は自由な移動と引き換えに、さまざまな不自由を受け入れることになるのだと思います。また倫理学の領域で移民というと、ナショナリズムとの関係が問題にされることが多いと思います。

ちょうど今私は、人権というものを中心に研究しているので、またお話をお伺いする機会があればと思っています。

## 明石純一先生のお話を聞いて考えたこと

人文社会科学研究科 文芸・言語専攻

応用言語学領域 4年

許 挺傑

本日の IFERI セミナーでは、政治学がご専門の明石純一先生がお話をしてくださった。自分の研究領域である第二言語習得の研究分野とは、随分違う研究分野でのお話であったが、これから博士論文の執筆などに取り組む自分にとっては、非常にためになるお話であった。

たとえば、博士論文を書く時には、人間としての人間くささと、研究者としての学術的な客観性をバランスよく維持することに苦労したというようなお話があったが、思えば自分もまさにそのような苦労をしていることに気づく。

というのは、自分の研究では、接触場面における日本語学習者の発話データを扱っているが、データを分析する際に、当然、研究者としての客観的な目線でデータを観察する必要がある。しかし、筆者は研究者である同時に、一人の日本語学習者でもあるため、データを観察する際にどうしても学習者と同じ目線で見てしまいがちである。

研究データを観察する際に、学習者と同じ目線でデータを観察することができるのは、ある意味では、学習者でもある筆者ならではの利点もある。一方で、一歩間違えてしまうと、研究データの客観性を損ないかねない事態を招いてしまう可能性もある。

この問題への解決策などについては、先生のお話では、特に言及されていなかった。しかし、当面その解決策がなくても、自分と同じような悩みを抱えていた人がいることを知ったことで、いささか勇気もらったような気がする。